Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ドイツにおける日本人交換留学生のネットワーク構築に関する研究 |
| Author(s) | 中野, 遼子 |
| Citation | 大阪大学, 2016, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/55710 |
| rights | |
| Note | やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

# 論　文　内　容　の　要　旨

| 氏　名　（　　中野　　遼子　　） | |
|---|---|
| 論文題名 | ドイツにおける日本人交換留学生のネットワーク構築に関する研究 |

論文内容の要旨（3999字）

本論文の目的は、ドイツに派遣された日本人交換留学生が現地で構築するネットワークについて、その機能と構築方法および活用状況を明らかにすることである。さらに、ネットワーク構築に影響を与える環境的・個人的要因を解明するとともに、今後の日本人交換留学生教育のあり方も検討する。

第1章では、筆者が本テーマに関心を持つに至った経緯および本研究の目的、そして短期交換留学制度の定義について述べている。筆者は自身の交換留学体験から、留学生活が現地での人的ネットワークに大きく左右され、そのネットワークの構築には個人的資質だけでなく大学の留学生受け入れ体制などの環境的な要因も影響していることを実感した。先行研究でも、留学生のネットワークが留学への満足度に大きく関係していることが指摘されている（内海・吉野、1999:30）。近年海外で学ぶ日本人学生数は減少しつつあるが、大学間協定等に基づいて留学する学生は増加傾向にあり、ネットワーク分析を通して留学交流研究を行うことは有意義であろう。

第2章では、日本とドイツにおける留学制度（派遣・受け入れ）について論じている。その際、EU圏の学術交流の基礎となったボローニャ・プロセスやEU圏対象の交換留学制度であるエラスムス計画に関して記述している。さらに、日独の大学が定める交換留学の目的についても触れ、どちらも「文化学習型」（井上、1996）であり、交換留学生には異文化体験による視野の拡大や、個人の目的達成・成長が期待されている。

第3章では、留学生関連研究に必要な異文化適応研究について論じ、次にネットワーク研究、具体的には、パーソナル・ネットワーク、異文化間・日本人間の友人関係、および本研究と最も関連深い留学生のネットワーク関係の先行研究を概観し、本研究に必要な概念を整理した。そして、留学生のネットワーク関係の先行研究には、外国にいる日本人留学生を対象とする研究がまだきわめて少ない状況にあること、また実際のネットワーク構築の過程や留学生を取り巻く環境的要因との関係を調査した研究も不足していることを指摘した。

第4章では、本研究で行ったフィールドワークやインタビュー調査、さらに分析方法として用いたM-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）、そしてフィールドの概要について記述した。本調査はネットワーク機能調査（第5章）とネットワーク構築要因調査（第6・7・8章）に分かれており、調査協力者は、2006年から2014年の間に、ドイツの大学に1年間の交換留学経験がある日本人44名（機能調査16名、構築要因調査28名）である。

第5章では、ネットワークが留学生のドイツ生活への適応に果たす役割を、中山（2001）を参考に、ネットワーク機能として分類した。機能調査協力者16名のネットワークの事例を分析した結果、先行研究を参考に全部で7つのネットワーク機能を確認できた。具体的には、①情緒的機能（a.気晴らし、b.信頼、c.安心）、②役割意識提供機能、③ドイツ語学習機能、④異文化学習機能（a.文化的知識提供機能、b.異文化体験提供機能、c.異文化体験促進機能）、⑤情報提供機能、⑥生活支援機能、⑦仲介機能である。このうち、本研究において新たに追加したのは、②役割意識提供機能（ネットワークの人物と関わることで、自分がドイツで役に立っていると感じられる機能。主に日本に興味のあるドイツ人から提供される）、④-b.異文化体験提供機能（日本人同士のネットワークだけでは体験できないことを提供する機能）、④-c.異文化体験促進機能（1人では難しいことを、一緒に行うことで協力者の異文化体験を促進する機能）である。在独日本人交換留学生の多くにはドイツで推奨されているタンデム（言語交換）パートナーがおり、日本語を教える機会、さらに協力者16名のうち15名が異文化体験を提供してもらっていることから、役割意識提供機能と異文化体験提供機能は在独日本人交換留学生のネットワークにおいて重要な機能であるといえる。また異文化体験促進機能の事例を持つ3名の協力者はこの機能の提供者に非常に感謝しており、留学生活の満足度にも大きく関係している。これらの機能は、留学生の体験や行動を促すという点で重視すべきものである。

第6章では、ネットワーク構築に影響を与える環境的要因を考察した。構築要因調査協力者の事例をM-GTAを用いて分析した結果、環境的要因は18個のカテゴリーに、さらにそれらを①組織的要因（8カテゴリー）、②社会・文化的要因（6カテゴリー）、③家庭的要因（4カテゴリー）の3つの大カテゴリーに分類することができた。これらの環境的要

因は複雑に絡み合いながら、留学生のネットワーク構築に大きな影響を与えている。そのうち、オリエンテーションの形式といった組織的要因は受け入れ側に制度的な整備が可能であり、社会・文化的要因や家庭的要因は改善困難であるが、受け入れ側がこれらの要因を考慮に入れたり、派遣側が交換留学生に必要な情報提供やアドバイスを行ったりすることで、留学成果向上への手助けとなることを述べた。また、各大学の交換留学制度と在独日本人交換留学生のネットワークを関連させて考察した結果、彼らのネットワーク構築には日本学科の日本人教員の存在が特に大きな影響を持っていることも明らかとなった。

第7章では、ネットワーク構築に影響を与える個人的要因およびネットワーク構築方法について論じている。第6章と同様の分析を行い、個人的要因は11個のカテゴリーに分類することができた。さらにそれを整理し、岡田（2010）や鈴木翔（2012）を参考にして、ネットワーク構築様式として「群れ指向群（楽しさを求め、友人といつも一緒にいようとするタイプ）」、「準群れ指向群（普段は個別関係群のメンバーといるがパーティーなどがあると群れ指向群といようとするタイプ）」、「個別関係群（個々の友人との関係を大切にし、大人数を好まないタイプ）」の3タイプに分類した。このような分類の理由としては、ドイツ語が話せないストレスの解消方法として、日本語を使用して楽しむ（群れ・準群れ指向群）、反対にさらに勉強する・引き籠る（個別関係群）というドイツ語学習態度の違いが主な要因の1つであるといえる。また、群れ指向群と個別関係群に関しては、他大学および機能調査でも観察され、様々な年代や場所で起こりうることが明らかとなった。さらに、ネットワークの利用方法を髙濵ら（2009）を参照し、「集約型（最も親密なメンバー1名から、ネットワーク機能の提供を受け取るタイプ）」と「課題特定型（ネットワーク機能の提供に関して最適なメンバーを選択するタイプ）」の2つに分類し、ネットワーク構築様式と合わせて、在独日本人交換留学生のネットワーク構築方法を全部で6タイプに分類した。

第8章では、留学生によるネットワーク構築の具体的事例として、エアランゲン大学の協力者の中で特にドイツ語力の向上が著しく、様々な異文化体験を経験したE13、E14、E15に焦点を当て、そのネットワーク構築の過程と活用状況を記述した。高い留学成果を得られた3人の事例を比較検討した結果、彼らは同じ留学環境にいながらも、広く浅い・狭く深い付き合いおよび疎遠になる者が混在する流動的なネットワーク（E13）、広く浅く、ときどき深い固定的なネットワーク（E14）、狭く深い固定的なネットワーク（E15）という全く異なった友人関係を構築していた。しかし、3人のネットワークには共通して役割意識提供機能、異文化体験提供機能、異文化体験促進機能が多く、また環境的要因の「タンデムパートナーとの深い関係」、そして個人的要因の「新しいことに対する肯定的態度」、「行動を促してくれる存在」が観察された。これは、ネットワーク形成がうまくいかなかった協力者には見られないことから、上記のネットワーク機能や環境的・個人的要因は交換留学の成果を上げるために重要な役割を果たしていると考えられる。

第9章では、潘（2013）を参考に、構築要因調査で得られた環境的要因および個人的要因を整理して「在独日本人交換留学生のネットワーク構築に影響を与える要因図」として提示した。そして、本研究から、ネットワーク構築に特に重要な点として、①役割意識の重要性、②ネットワークのハブ（中心）の存在、③ネットワーク構築のタイプ別サポート、④交換留学生が目指すべきネットワークという4点が浮かび上がってきた。留学生に役割意識を提供するネットワークの重要性は先行研究でも指摘され、そのためには大学側による制度的・教育的介入としての「仕掛け作り」が必要である（加賀美、2007；小松、2013b）。その仕掛け作りのためには、日本人教員による支援が特に大きいことを第6章で述べた。日本人教員はネットワークの「ハブ（中心）」（E15）という役割を果たしており、彼らによるドイツ人のタンデムパートナー等の紹介は、交流を促す「仕掛け作り」であるといえる。また、仕掛け作りの際、「留学生が望まない援助」（加賀美、2007）を回避するために、第7章で分類した各ネットワーク構築様式別の交流支援に関しても述べた。次に、交換留学生が目指すべきネットワークとして、多くの新しい価値観や異文化体験を獲得したE14の「広く浅く、時々深い固定的なネットワーク」を例示した。最後に、今後の日本における交換留学生派遣制度の提案として、①ネットワーク分析を用いた交換留学生教育、②ネットワーク維持のためのストラテジー教育、そして③留学後カウンセリングによる留学成果の意識化という3点を提示し、さらに留学生受け入れ制度への教育的示唆として、①留学生への役割意識提供と②交換留学生と日本人学生を繋げるハブ（中心）による支援の重要性を指摘した。今後、ネットワーク分析を用いた留学交流教育の更なる発展が望まれる。

様式７

# 論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏　名　（　中　野　　遼　子　） | | | |
|---|---|---|---|
| 論文審査担当者 | （職） | | 氏　　名 |
| | 主 査 | 教　授 | 我　田　　広　之 |
| | 副 査 | 教　授 | 西　口　　光　一 |
| | 副 査 | 准教授 | 津　田　　保　夫 |

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、ドイツに派遣された日本人交換留学生が現地で構築する人的ネットワークに関して、それが彼らの留学生活にどのような影響を与え、留学成果の向上にどのように役立っているのかを、その機能に着目して明らかにするとともに、各自のネットワーク構築に影響を与える環境的要因および個人的要因を解明し、またネットワーク構築方法を分類した上で、今後の日本人交換留学生教育のあり方を検討しようとするものである。

全体は９つの章からなり、第１章で本研究の目的および交換留学の定義を記述したのち、第２章では本研究の背景として日本とドイツにおける留学生派遣・受け入れ状況、さらに交換留学の目的についてまとめている。続く第３章は先行研究の検討に充てられ、留学生関連研究にとって特に重要な異文化適応およびパーソナル・ネットワークをめぐる先行文献の知見を整理することで、本研究の枠組みを提示している。第４章では本研究で実施した二つの調査、すなわち、ネットワーク機能調査（調査協力者16名）とネットワーク構築要因調査（調査協力者28名）について、そのフィールドワークやインタビュー調査、分析方法等の概要が紹介されている。第５章は前者の調査結果を取りまとめたものであり、人的ネットワークが留学生のドイツ生活への適応に果たす役割を７つのネットワーク機能として抽出している。第６章では後者の調査結果のうち、ネットワーク構築に影響を与える環境的要因を考察し、それらをさらに組織的要因、社会・文化的要因、家庭的要因の三つに下位分類している。引き続き第７章では、ネットワーク構築に影響を与える個人的要因を分析し、それらを整理して６タイプのネットワーク構築方法を示している。第８章は事例研究として３名の協力者の留学生活を詳細に描き、第５章から第７章にかけて考察した個々の機能や要因が実際に観察される様子を記述している。最後に、第９章ではこれまでの総括として「在独日本人交換留学生のネットワーク構築に影響を与える要因図」が提示され、それを踏まえて、これからの日本における交換留学制度のさらなる充実に向け、具体的な提案を試みている。

以上のような内容の本論文に関しては、とりわけ次の点が評価される。

1. 人的ネットワークに関連する先行研究を精査し、本研究での調査資料と照合することによって、交換留学生のネットワーク機能に関する独自の枠組みを提示している。
2. ネットワーク構築の過程を環境的側面と個人的側面とに分けて考察し、その下で各種の要因を抽出することに成功している。
3. 具体的なネットワーク構築過程を３人の事例に即して綿密に追跡し詳細に検討しているのは、この方面の研究として非常に資料的価値が大きい。

ただし、審査の過程において、個々の機能や要因の分類方法について必然性が十分に示されていない、論述の部分相互の関連付けがまだ不十分であるなど、今後の体系的な研究に向けて改善を要する点についての指摘があった。しかし、それらも決して本論文全体の価値を損なうものではなく、むしろ本論文の詳細な調査の成果は、この分野における今後の研究にとって重要な資料となりうるものであり、また実際の留学生へのアドバイスや支援といった実務的な面でも有益であると考えられる。

以上のことから、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、本論文について、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添える。